

俗は觸接のタプーの延長なり。このタプーは文化の或程級に於ける普通の現象なるを詳説せり、尙其習俗を有する民族の分布を説き附するに分布圖一葉を以てせり。本邦に於ては此種の研究從來殆んど闕却されし觀あり、博士が此の研究によりて古代文化の上に新らしく問題の提案せる、は最も悦ぶべき所なるべし。(西田)

●神道沿革史論

文學士 清原貞雄著

上代より徳川末期に至るまでの神道の沿革を純客觀的見地に立ちて説述せるものにして、編を分つ事六、第一編には外國の影響を受けざる以前固有神道を概説し「カミ」なる語の意義より其種類を掲げ、神人の關係等に就て國民が如何に解し居たるかを明かにし、それが要素たる祖先崇拜の性質、神道と國民道德、祭祀と農業との關係等を論じ、第二編には始めて外國の信仰を輸入したる結果、從來の信仰に那邊まで影響を及ぼしたるか、又祭祀の形式に於て、支那に於ける儀禮等の取り入れられたる點、又外國信仰の新に輸入せられて神道中に包含せられたるもの等を述べ、第三編には此外國より輸入せられたる信仰即ち儒教、佛教乃至道教等と我神道との關係が漸く熟して、種々の形に於て結合したる由來を説き、夫等の相互又は混淆的關係に依りて新に生じたる信仰狀態、就中、佛教との融合に依りて生じたる本地垂迹説を、其生成の階段を追うて最も詳細に説明し、又此期の特色の一たる陰陽

五行説の國民生活に及ぼしたる點、殊に神道史上に於ける意義より又此思想に基きて生じたる神祇等に説き及ぼし、第四編及び第五編には主として鎌倉時代以後に勃興せる神道學説、即ち伊勢神道、天台神道、法華神道、眞言神道、儒學者側の神道説、社家の神道等を中心として論じ、殊に此期の特色ともいふべき緣起物の意義並に種類を説き、合せて大成せる本地垂迹説を説明せり第六編は徳川時代に入りて、儒教の勃興と共に神道が佛教と離れ漸く儒學と結びて神儒習合神道ともいふべきものゝ起り、更に儒教と相反撥するに至りしことより、此期の中葉以後隆盛に起きて所謂復古神道學派と儒教者派との間の論争に及び、同時に此期に於ける、從來の佛教神道の如何なる狀態にありしかを説き、一方には又此期に入りて發生せる所謂教祖神道なるものゝ起源並に其性質を説述し、最後に、明治以後に於ける神道界の趨勢を概説し佛教界との離合に及び、併せて今後研究すべき又整理すべき諸問題を考量して筆を擱けり。神祇の沿革や、歷代教神の事實を講述し、又一流一派の神道説を紹介せるもの、世間其書なきにあらずと雖も、國民の神道思想の變遷を中心として、各時代に亘り、系統的記述と批判とを加へたること、本書の如きは未だこれあるを見ず。加ふるに其敘事簡明にして行文平易なり。其學者に裨益すること蓋し尠少にあらざるべし。吾人は近刊書中の白眉としてこ

れを推奨するに容ならざるものなり。本書本文縮版四四二頁、別に索引を添ふ。(東京大鑑閣發行、價、二五〇)

●●●●●●●●●●
豊太閣と其家族

文學博士 渡邊世祐著

本書は歴史講座の一編にして、豊太閣と其家族との關係を叙述し、以て彼が豪華なる生活の裏面に於ける肉的生活を明かにせるものなり。行文平明多く太閣自筆の消息等を掲げて説明を加へたり、先づ總論に於ては其系圖及家族關係を見、身卑賤より起りしを以て門地の向上を圖らんが爲め、其養子養女を多く名門に遣し妃妾は名家の出か選びたりしを説く。第一章太閣の誕生に就ては從來の諸説を擧げて之を批判し、最後に最も信憑すべき素生記によりて、實父は木下彌右衛門にして七歳にして孤となり、繼父として竹阿彌を迎へたりと斷ず。第二章太閣の生涯には其生年を天文六年丁酉二月六日として申歲又は一月元旦誕生説を排し、彼が松下之綱、織田信長に仕へし事より、長濱町の創設、大阪築城、官位昇叙、天下統一、幼兒と生母、及其晩年に至る迄の生涯を概説し、第三章ヲ柴秀勝と豊臣秀勝にては、彼には初め實子か養子か定かならざれども、秀勝なる子あり、其夭折後信長の四男於次丸を迎へ、養子として秀勝と名附け丹波に封ぜしが、其薨後更に甥小吉を迎へて秀勝と稱せしめ、丹波に封ぜりとして、太閣の子に三人の秀勝ありしを言へり。第四章豊臣秀次は秀次が太閣の姉日秀

と三好一路との間に生れ、阿波の名族三好康長の養子となりし事より、彼が小牧に於ける態度の膽甲斐なかりし事及び之に對する秀吉の苦衷を叙し、秀次の全盛を語り、秀賴の出生後、秀吉と秀次の疎隔は否むべからずして、秀次の女を秀賴に嫁せしめんとせる秀吉の苦慮は、秀次をして秀賴に譲らしめんためなりとし、秀次は好意なりし半面に暴戾の質あり、其不謹慎なる態度は彼の自滅を招きしも、彼に謀叛の企なかりしは明白なりとし、之に對する太閣の處分の冷酷を極めたりしは、彼の如き天才的人物には有勝の事なりとし、秀次の滅亡を以て石田・増田の譏に歸する説はなほ再考の餘地ありとなす。第五章鶴姬は淀君との間に生れたる長男拾君の事なりとて太閣鐘愛の狀を記し、其夭折は朝鮮征伐の素志を急に實施せしめたりとなせり。第六章秀賴は彼が拾君と名づけられし事より、名護屋陣より大阪に歸來して幼兒を見し太閣の愛情を語り、其死期に臨みての煩悶懊惱を叙す。第七章大政所は主として秀吉の大政所に對する孝養、其計を聞いての悲歎を叙し。第八章北政所は其家系を繰返して杉原助左衛門の女なりとし彼女が非凡の才媛にして常人の企て及ばざる所多く、内助の功極めて大なりしを説き、夫婦間の親密なりし事より、淀君との間に上下の別を正し、事を語り、高臺寺の建立に言及す。第九章淀殿は、天正十六年頃、二十歳以上にして太閣の側室となりし事より

秀吉の愛情、其勢力を記し、第十章に於て北政所と淀殿との關係にては貞淑にして人望ありし北政所と、醜聞を傳へられた淀殿との間に自ら抗争の生ぜしは自然の數にして、関中黨を立て關ヶ原役の誘因たりし事否むべからずと言へり。第十一章太閤の同胞にては太閤の異父弟秀長、姉日秀、妹南明院夫人の事蹟を略述し第十二章小早川秀秋にては北政所の弟たる彼が隱然として太閤の後繼者を以て目せられしに、出で、小早川隆景の後を繼ぎ、朝鮮再征の主帥に任ぜられながら、驚鈍にして、暴慢なる彼は、隆景の舊制に違ふ事多く、關原役には終に家康に應じて西軍潰敗の種を播きしは全く北政所の指示に依れるならんと推定す。第十三章結論に於て、秀吉は政略上父を顯はさざりしも、其祖先に對しても父に對しても相當に奉仕せし事、養子相顔で曉れ、家庭の主人としての不運を認め、家族に對して寬嚴其宜きを得たるも、なほ淀殿を溺愛せし事を指摘して彼は理性の人に非ずして情の人なりと斷じ、太閤の同情を惹く所以亦こゝにありと結ぶ。三五版三百頁餘の小冊子ながら、よく太閤の内の生活を叙説し、加ふるに隨所に畫像、筆蹟、墓所等の寫眞三十五葉を挿入したれば讀過の際無限の感興をそゝるを覺ゆ。（日本學術普及會發行、定價一、八〇）

〔中村〕

●元祿時代觀●

文學士 中村孝也著

本書目次記する所、元祿時代の地位、町人階級の勃興、元祿寶永の政局、元祿寶永度の金銀貨改鑄、元祿寶永前後の世態、元祿時代の文藝、ケンヘルと元祿時代あり。著者は元祿時代を以て近世文化史上の最高潮期なりとして、文運の隆興、藝技の昌榮と濃艶豪快の氣向と應揚寛濶の世相を讚美せんとしたるが如し、著者は此くの如き時代の開展は幕府政治の成立を安全ならしむべき重要問題、即ち對外、財政、朝廷及諸侯並に浪人に關する諸種の問題が何れも此時代に於て解決せられたるに因由するものとし、且つ此時代の特殊の色彩には町人階級の勃興ありて、大に江戸の如き大都市の發達、武家と町人の接觸等を見るに至り、政治の方面にては政治家の個性と政局の推移に論ずべきものありとし、一般世態に就いては敵討游廓の繁昌情死の流行より浮世草紙淨瑠璃、詩界の狀況等を詳説し、時代の國民生活を論ぜり。本書もと讀者と共に史興を樂よんとして、著者の筆を走せしものと其自序に記する如く、其敘述に於ては必しも精選琢磨を経たるものと云ふにあらず、繁簡に於て人考ふる所を異にすべしと雖も、而も行文興趣あるに力めて著者感興の來往觀る如く、又一般讀書界の讀物として薦むべきものなるべし。（啓成社發行、價二、八〇）〔西田〕

●神祇史綱要●

宮地直一著

本書は著者が昨年四月東京文科大学に於ける公開講義の手記に